

# カウンター・ハンター

A・ZAP

例えば、そう例えば、だ。

利発そうな顔立ちをした少女がいる。服装から、短絡克つ的確に一言で表現するならば修道女<sup>シスター</sup>。黒を基調とし、髪を全て包み込む被り物<sup>ウインブル</sup>をした一般的な……ただスカートの右部は動きやすくするためか、深いスリットが入れられているが……そんな尼僧服を身にまとい、両手にはしつかりと槍を握りしめている。そんな少女が、満月の夜に人気<sup>ヒトケ</sup>のないオフィス街の裏道にいるという非現実的な光景を想像できるだろうか？

更に、右手には日本刀。左手には拳銃<sup>オートピストル</sup>。トレンチコートを羽織った男……こちらも短絡且つ的確に表するなら「狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>」と呼ぶべき者。その男が少女と刃を交えているとしたら、どうだろうか？

あまりに現実離れしている光景だが、しかし昨今のアニメやゲーム、あるいは小説などに溢れたありとあらゆる幻想物語<sup>ファンタジー</sup>に慣れ親しんでいる者ならば、想像するに難くないという者もいるだろう。美少女と怪物。あるいはこの組み合わせ、慣れ親しんでいる者からすれば定番と受け止められるかもしれない。

定番通り<sup>お約束</sup>といふべきか、状況は狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> 有利に動いている。

少女は狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> めがけ何度も槍を突き刺そうと試みるが、その都度<sup>ウエア・ウルフ</sup> 狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> は刀で槍先を突き突きをかわしている。金属音が幾度か静かなオフィス街に響くが、その音を耳にする者は二人を除いて周囲にはいない。そんな攻防が何度か続いたところ、隙を見て<sup>ウエア・ウルフ</sup> 狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> が左手に持った拳銃を発砲。少女の黒い服に真っ赤なシミが広がる。どこか大人びた雰囲気、しかし印象的には中高生にも見える少女の顔が苦渋に満ちる。彼女の瞳はまるで炎を携えているかのように熱く怒りに燃え、狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> を見据えていた。

それでも槍は怪物めがけ何度も突き出される。しかし結果は同じ。二発目の発砲音が周囲に響き、二つめの真っ赤なシミが出来ていた。

それでも、それでも。少女は眼光鋭く<sup>ウエア・ウルフ</sup> 狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> を射抜き、槍を確実に奴の身体へ貫き通さんと足を踏み出そうとする。

が、その足は踏みとどまった。

「チエックメイト……つてとこかな、お嬢さん」

余裕の言動。少女は狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> の見せる態度に腹を立てたか、僅かばかり目を細め眼光を更に鋭くさせた。

狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> の持つ刀は、その刃を少女の喉元すれすれに突き立てられている。後は狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup> のさじ加減一つで少女の首はいつでも飛ばされる……そんな状況。これでは一歩も動けない。

美少女の危機<sup>ヒロイン</sup>。さて、これがアニメやゲーム、あるいは陳腐な三流小説にありがちな定番<sup>お約束</sup>通りの展開なのだとすれば、そろそろ超絶美形<sup>パーフェクト</sup>な主人公<sup>ヒーロー</sup>が登場するところだろう。

だがしかし、現実はその簡単でも短絡的でもない。

そもそも、何か勘違いをしてはいないだろうか？ この場を見ている第三者がいるとす

れば、確かにこの光景は少女が怪物に襲われピンチを迎えていると、そう見えるのは否めない。しかし現実には固定概念という思いこみ通りでは、決して無い。

「おおー、気の強いお嬢さんだね。流石はこんな時間にこんな所で一人俺に襲いかかってくるだけはあるってところはあ……ってところかな？」

そう、現実には全くの逆である。

襲われたのは ウエア・ウルフ 狼男。襲ったのは シスター 修道女の少女。この光景は、襲われた ウエア・ウルフ 狼男 が返り討ちにした、そういう場面である。少女に睨みつけられながらも、ウエア・ウルフ 狼男 は軽口を叩き少女を挑発し、彼女の口元を悔しそうにつり上げさせている。

確かに襲われたのが ウエア・ウルフ 狼男 の方だとしても、少女が危機的状況にあることに変わりはない。

「さてと、お嬢さん。ここで会ったのも何かの縁だ。ちょいと話を聞きたいんだが、いいかな？」

一般的な狼男といえば、満月の夜に遠吠えと共に現れ、人々を長い爪で切り刻んでいく残忍で野蛮なイメージがあるだろう。しかしどうもこの男、そのような一般的なイメージとはかけ離れている。そもそも、タートルネックのセーターやジーンズを着ている時点で一般的イメージとはずいぶん違う。さらにトレンチコート……先ほどの戦闘のためか、いくつかが槍で開けられたと思われる「穴」が点在しているコートまで羽織っているのは、あまりにも一般イメージと違いすぎる。同じなのは、今が満月の夜だということくらいか。

その型破りな ウエア・ウルフ 狼男 は、野性的ではなく理性的にかつ冷静な口調……まあ、どちらかといえば小馬鹿にしている雰囲気ではあるが……少女に問いかけた。その落ち着いた態度が、もしかしたら少女にとつて余裕からくる見下した態度と受け止められたのか、少女は槍を持つ手にさらなる力を入れ、睨み続けた瞳にもさらなる力を入れ口を開く。どうにもこの ウエア・ウルフ 狼男、意識の有無はさておき人を怒らせるのに長けている様子。

「……殺したらどうだ」

感情を乗せない言葉は、彼女の態度同様、とても硬い。言葉の意味だけを取り上げれば諦めの言葉と受け止められるが、しかし彼女の態度からして、言葉は諦めより気の強さを表していると印象づける。

少女の態度に、ウエア・ウルフ 狼男 はつい長い口の端をつり上げて少女を更に挑発してしまう。いや、少女はそう受け取っただろうが、少なくとも男にはその意図はなかった。ただ関心と呆気、二つの感情が同時に沸き立った結果の表情でしかなかった。

「殺して欲しいのか？」

答えが判っていないながら、あえて尋ねる ウエア・ウルフ 狼男。そして答えは予想通り、無言という形で返された。つり上げていた口元は緩み、その口からは大きな溜息。銃口を下に向けていた左手は後頭部へと運ばれ、そこを掻き始めた。

状況は変わっていない。しかし男の心情は関心と呆気から困惑へと移り始めていた。いや、元々彼は少女と出会った時から困惑していた。移り始めたと言うよりは戻り始めたと言うべきかもしれない。

「いくつか聞きたいんだが……」

最初の問いかけに話を戻しながら、男は少女が素直に答えてくれるのかどうか、自ら発した言葉を心中で疑問に感じている。感じていると言うよりは、答えないだろうという確

信に近いが。

利発な顔立ちから受ける印象は冷静<sup>クール</sup>。しかし睨む瞳がその印象を打ち消している。加えて劣勢にいながら崩さない彼女の強気な姿勢は、反抗の意をまざまざと示しながら心の内に熱い物を滾<sup>たぎ</sup>らせている事を男に伝えていた。表情は薄いが「怒り」の感情だけは瞳と霧<sup>オウラ</sup>囲<sup>イ</sup>気で強く大きく伝えている……といったところか。

考えてみれば、彼女の行動は最初から冷静ではなかったな。まず何から尋ねようと考えていた男は、それを思い出し最初の質問を決めた。

「何故俺を襲った？」

襲われた側としては、当然その理由を知りたくなるものだ。男の質問は当然の疑問から生じたものと言って良いだろう。

第三者がどう思おうと、<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>が被害者で修道女<sup>シスター</sup>が加害者。正義がどちらにあるかは、その立場だけでも立証できるはずなのだが……イメー<sup>ヒーロー</sup>ジ<sup>レ</sup>がそれを邪魔している。

しかし賢明な者はもうお判りだろう。本当の主人公<sup>ヒーロー</sup>が誰なのかを。現実は大衆向けの脚本通りではないのということ。

「見たところ……どこかの教団に所属している修道女<sup>シスター</sup>か。それも武闘派の」

ごく一般的な者が、趣味で修道女<sup>シスター</sup>の格好はしないだろう。いや、<sup>コスプレイヤー</sup>する者もいるが、槍<sup>ウエア・ウルフ</sup>を持って<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>に斬り掛かる者が単なる趣味人<sup>コスプレイヤー</sup>とはとても思えない。

口を閉ざしたままの少女に代わり、男は口を動かし続ける。

「その印は……グノーシス十字か。なるほど、異端教団<sup>カルト</sup>の戦士……差詰め聖騎士<sup>パラディン</sup>ってどこか？ ま、騎士様<sup>カルト</sup>って感じには見えないがね」

円の中に十の字。黒い尼僧服の胸元に白く刺繍されたこの印こそ、彼女がグノーシス主義に属する異端教団<sup>カルト</sup>の一員である証<sup>ウエア・ウルフ</sup>。狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>は続けて彼なりの憶測を次々と口にしていく。

「世界の創造は善性の至高神<sup>ハイオン</sup>ではなく、悪しき創造主<sup>デミウルゴス</sup>によって行われた……ってのがグノーシス主義の教えだったか？ 正統派のキリスト連中から異端扱いされながらも、色んなグノーシス主義の教団が産まれては消え産まれては消え……を繰り返しているって話だったな。お嬢さんが所属しているのもそんな教団なんだろう？」

<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>の問いかけに、少女はただ睨むだけで一切口を開こうとはしなかった。その様子に大きく溜息をつきながら、それでも男は自分なりの予測を披露し続けた。

「で、なんだ。おおかたキミンとこの教団は、テンプル騎士団<sup>ナイト</sup>みたいな武装集団まで結成して、血なまぐさい救済活動をしている……と」

少女はまだ口を閉ざしたまま。だが僅か、ほんの僅か、睨む瞳の上に位置する眉が、ピクリと動く。

核心を突いている。少女の動揺を見逃さなかった男は、たたみ掛けるように憶測を口にし続けたかったが……しかしついて出た言葉は疑問という質問だった。

「しかし解<sup>け</sup>せないな……確かあんたらは、異端とはいえ知識<sup>グノーシス</sup>を追求する一派で、武装集団を組織するような宗派じゃなかったはずだが……」

沈黙。少女は肯定も否定もせず、一切の反応を示さなかった。しかしグノーシス十字の刺繍が入った尼僧服を着て、そして槍<sup>ウエア・ウルフ</sup>を持って<sup>ウエア・ウルフ</sup>自分<sup>ウエア・ウルフ</sup>に襲いかかってきたのは間違いない。となれば、新たに産まれた異端教団<sup>カルト</sup>は、グノーシス主義を取り入れながら、武闘派の

考えも取り入れた一派なのか？　　<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男　は何も答えない少女の言葉を待たず、あれこれと推理を脳内に巡らせていく。

確かなのは、この少女はその新たなグノーシス一派の信者であり、<sup>ウエア・ウルフ</sup>自分を確信持つて狙い撃ちに来たこと。それだけは確かだ。

その根拠。それはタイムミンクの良さにある。

彼は一つの噂を流し始めていた。それは「満月の夜に、オフィス街の裏道で<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男を見た」という、都市伝説にもならないような与太話。むろん与太は<sup>臆</sup>満月の夜に、オフィス街の裏道で」という前半部分で、後半の<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男は実在するわけだが。

この噂話を自身で流し始めてから最初に訪れた満月の夜。それが今日。つまり彼は、自らを狩りに来るような者達……<sup>ハンター</sup>狩人を待ち伏せていた訳だ。ただ彼も、その<sup>ハンター</sup>狩人がこのような少女だとは思ひもなかったわけだが。

彼の方が襲われたのは事実。しかしそう仕向けたのは彼自身。餌に食らいついた少女は返り討ちに合い、逆に狩られようとしていた。

「全く、迷惑な話だぜ……」

何度目の溜息だろうか。男は大きく息を吐き出し、沈黙を守る少女へ、今度は諭すような言葉を続けた。

「あんたらが信じる悪しき創造主<sup>デミウルギウス</sup>ってのがいるかいなかったのは、まあこの際置いておこう。で、結局さ、俺が何をしたらって言うんだい？」

刀を下ろし、<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男はずいっと身を乗り出し少女の顔に自分の顔を近づける。どのような教えに基づいて<sup>ウエア・ウルフ</sup>自分を狙ったのかは定かでない。しかし九分九厘、このような考えがあつてのことだろうと<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男は推測は出来る。そしてそれを口にした。

「まさか、俺が<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男だっただけで罪なのかい？　悪なのかい？　まったく、俺様みたいな善人つかまえて酷いよなあ」

本人の主張はともかく、極一般の人々から見れば、彼が<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男だというだけで恐ろしい存在であることに代わりはないだろう。そもそも善人な<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男など、人々の話で聞いたことなど無い。

しかし一方的に<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男である彼を悪とする根拠も、実は無い。彼が主張するように、少なくとも少女は男が何らかの悪行をはたらいた場面を見たわけではないのだから。あくまで彼女は、噂を聞きつけこの場へとやって来たに過ぎず、<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男を発見したために襲いかかっただけ。もし噂が事実だったことと、その<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男が刀や拳銃を所持していることが証拠だと言うなら、槍を持った<sup>カルト</sup>異端教団の<sup>ハンター</sup>狩人である彼女はどのようなだろうか？

「……お前達は、<sup>かたき</sup>敵だ」

ようやく開く、重かった少女の唇。そこから放たれた言葉は、唇よりも重かった。

少女は一度まぶたを伏せ、これまでの中で一番鋭い眼光を深々と突き刺してやるとばかりに再びまぶたを見開いた。

まぶたに一度隠れていた瞳は、開かれた時全てが敵意という色に染まっていた。

「パパやママを殺したのはお前達だ！　許さない、私は絶対にお前達を許さない！」

これまでの沈黙が嘘だったかのように、少女は叫んだ。腹の、心の底から叫ぶ声に、顔を近づけていた<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男は驚き身を起こした。そして絶叫の続きを黙って聞き続ける。

「なにが善人か、人殺し！ 今まで散々人を殺めてきた癖に、この悪魔め！」

最初こそ、少女の気迫に押されていた狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>であったが、興奮していく少女に対し、彼は逆に落ち着き、そして冷淡になっていった。

「……もう一度言うぞ」

先ほどよりもトーンの下がった声。半ばふざけた態度でいた男が、少女に負けぬ眼光で睨み付けながら言い放った。興奮していた彼女にも、彼の様子が一変したのを感じ取り、また口を閉ざしてしまう。

「俺が人を殺した現場を見たことでもあるのか？ 何かハッキリとした確信があつて言っているのか？」

少なくとも、少女の中には一つの確信があつた。

相手は狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>だ。理由はそれだけで充分だった。

それこそ、アニメやゲーム等に登場する怪物<sup>モンスター</sup>達は全て敵である、という「暗黙の了解<sup>お約束</sup>」こそが絶対的な理由。他に説明などいらぬ。

そう思われているであろう事を、狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>である当の本人は自覚している。だからこそ腹立たしかった。

「俺達<sup>ウエア・ウルフ</sup>が全員善人だとは言わない。しかしだ、ならば人間はどうだ？」

また口元が上がる。それは先ほどまでつり上げていた感情とは違う物の表れ。

「善人ばかりの種族なのか？ 違うよな。悪い奴らだってゴロゴロいる。それこそ種族の絶対数から考えて、お前達人間の方こそ「悪人」の人数は桁違いに多いだろ。君の言う「人殺し」は、一体全世界で何人いるんだい？」

日本という一国だけを見ても、毎年、毎月、毎週、殺人事件のニュースは報道されている。それだけを見て「人間は全て人殺しだ」というのはあまりにも乱暴な物言いだ。むろんそれを狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>に当てはめるのもしかり。

しかし人間と狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>とでは根本的に違う。そのように少女は、人間は考えてしまう。

その考えこそが根本的な誤りである……と主張したところで、人間である少女に、ましてや異端<sup>カルト</sup>教団の修道女<sup>シスター</sup>に聞き入れて貰えるかは甚だ疑問だ。

「君の両親が狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>に殺されたというのが事実だとしても、それは俺なのか？ 辛いことを訊くが……君は両親が殺されるところを見たのか？」

両親の話を持ち替えられてか、少女の瞳に宿る憎悪は強まる。特に最後の言葉へ瞳は強い反応を示したが、狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>はそれを無視して話を続ける。

「……君の両親が人外<sup>じんがい</sup>に殺されたというのが事実なら、同情もする。だが、無関係な狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>や他の人間外の種族を殺めていくのは筋違いだろ？」

理論立てればその通りだ。しかしそれを今この場で素直に受け入れられるか？ 答えは否。そんなこと、訊いた男にも解っている。

「……お前達は、敵<sup>かたき</sup>だ」

少女が今出せる結論は、結局これしかない。彼女自身にも、これが狼男<sup>敵</sup>からの質問に対する答えになっていないのは重々承知しているが、今言えることはこれだけであった。

まだ一般の者なら、狼男<sup>ウエア・ウルフ</sup>の説得に納得できる者も……少数だろうがいるかもしれない。しかし彼女は異端<sup>カルト</sup>教団の修道女<sup>シスター</sup>。歪んだ教義の元で「救済活動」を行っている彼女が、そう簡単に信じている教義を捨てられるとは思えない。

「……ま、しゃあないな」

手にした刀を背負った鞆に戻し、癖になりつつある溜息をつく。

ここで何を言っても聞き入れられないだろう。それも初対面で、しかも敵だと襲いかかった狼男の言葉を。男は残念な結果を納得し、少女に話しかける。

「君が俺を敵だと付け狙うなら、また会えるだろう。それまで生きておけ……本当に敵が討ちたいならな」

少女に背を向け、狼男は言葉を続けた。

「君もすぐにここを離れた方が良い。真っ赤なペイントが付いたボロボロの尼僧服を着ているその姿、人に見られるとかなり恥ずかしいぞ？」

ふざけた態度を取り戻した狼男は、また口元をつり上げ牙を見せる。少女は付けられたペイントよりも顔を赤くしながら、強さを取り戻した眼差しを去りゆく狼男の背に向けていた。

完全に遊ばれた。殺されることを望んではないが、殺されるよりも屈辱的だと少女は辛酸を嘗める思いでいた。

そもそも始めから、あの狼男はこちらを嘗めていた。その証明は、この付けられた真っ赤なペイント。実弾ではなくペイント弾を用いて戦っていたのは、狼男にとってこちらが本気になるだけの相手ではないと見下されている事を示している。思い返せば、刀もこちらの槍を受けるばかりで、攻撃はあまりしてこなかった。してきたとしても、僅かに服を裂くだけで踏み込んだ一太刀など無かった。こちらが相手に与えたのは、トレンチコートを傷物にしたという資産的ダメージのみ。

何のつもりだ？ 少女は戸惑っていた。

怪物は凶暴で、特に満月の夜に現れる狼男はとても危険だと聞かされていた。にも関わらず、あの狼男は弄びはしても凶暴とはほど遠い。終いには殺さずに去っていくとは………どういう事だ？ 彼の残した「説教」の言葉も合いまり、少女の戸惑いは深まる一方。

「……戻ろう」

考えて答えが出るとは思えない。少女は今出来ること………帰還するために一歩二歩と足を動かし場を去ろうとする。

敗北の屈辱と沸き起こった戸惑いを、満月に照らされ路地に映し出された影と共に引きずりながら。

「思わぬ収穫だったな、それは。まあ……良かったのか悪かったのか、俺にはよく解らんが」

ソファに深々と座りながら、一人の男……良く言えば恰幅の良い、悪く言えば太ったその男は、昨晚 狼男 が遭遇した少女についての報告を聞き、そう感想を述べた。

「むろん、良かったに決まっている。こうも早く餌に食いつく者がいるとは思わなかったからな」

馬の頭部を象った黒い駒を手にし、 狼男 がチェス盤を睨み付けながら話す。

「ただ……餌に食らいついたのがやっかいな獲物だったってのは、まあ……悩ましいところではあるな」

手にした駒を人差し指と中指で挟みながら、 狼男 は盤上にあつた白いポーンの駒を同じ手の中指と薬指で挟み持ち上げ、ナイトの駒と置き換える。

「相手が少女つてもやっかいだが、完全な思い違いをしているらしかつたからなあ。説得するには骨が折れそうだ」

白いポーンを盤面の横に立て、 狼男 は背もたれに寄りかかりソファへ深く身を沈める。そして軽く、しかし長い息を吐き出し、言葉を続けた。

「ついでに、所属しているのがグノーシス主義の教団だぞ？ それもなんだか知らないけど武闘派っぽい。キリスト系ってだけでやっかいなのに、更にややこしいことになるのは目に見えているし……あー、面倒くせえなあ」

両腕を背もたれの上に広げながら、 狼男 は愚痴をこぼした。チェス盤とそれを乗せているテーブルを挟み彼の正面に座っていた男は、その愚痴を一通り聞いたところで身を乗り出し、チェス盤を見つめながら唇を動かし始めた。

「その女の子が抱いてしまっている……まあ、ごく一般的な人ならすべからく抱いているであろう、「魔物イコール邪悪な存在」という誤った固定概念を打ち崩し、無益に魔物を狩る人間を説得するか退治する。それがお前の仕事だろ？ 愚痴ったところで仕事の中心は変わらないぞ」

顎に手を当てながら、太った男はチェス盤を睨みつつ視界から外れている 狼男 に説教を始めた。

「それに武闘派の連中は確かにやっかいだが、グノーシス主義なだけまだマシじゃないのか？ 「外なる神」だの「旧支配者」だのと言いつくされるよりはさ」

顔は盤面に向けたまま、視線だけを 狼男 に向ける肥えた男。口元は僅かに悪戯っぽくつり上がっていた。

「名前を聞くだけで発狂しそうになる神々をあがめる狂信者、か。いや、俺に言わせればそっちの方が気は楽だ」

もたれたまま、 狼男 はまだ次の一手に悩んでいる男に切り返す。

「狂信者ならもれなく「狩るべき対象」だからな。何も考えずに教団ごと潰せばいい。だが今回は、説得すべき人間が彼女以外にもいるのか、そして狩るべき人間は誰なのか……その選別をしなきゃならないのが面倒だね」

首を曲げ頭を背もたれに乗せながら、 狼男 は天上に向けられた長い口から溜息を吐き出す。

「世の中、そうシンプルならいいんだろ？ ね。しかしそれだと、 狼男 である君は少

女に「悪」として倒される立場でないといけない」

くく、と含み笑いを付けながら皮肉を込める男は、しかしまだ盤面を見つめていた。

「人間と魔物の共存。それを目指している俺達は、常に面倒な立場にいるんだよ」

口元は未だにつり上げながら、しかし顔を上げ眼差しは真っ直ぐに 狼男 へ向け、肥えた男は真面目な口調で語り続ける。

「その困難な目的の為に、不当な魔物狩りを食い止め、狩人に返り討ちを喰らわすか、場合によっては魔物狩りを止めるように説得する。それが君の、「カウンター・ハンター」としての仕事だろ、ケン」

名指しされた 狼男 はもたれていた身を起こし、広げていた腕を自分の股に置いた。

そして尖った口を首ごと少し前に突き出して言う。

「そんなこと、「妖精学者」たる天道寺先生に言われるまでもないですよ」

今度は 狼男 が口元をつり上げた。対して先生と呼ばれた男は眉を寄せ露骨に嫌な顔をする。

「先生は止めるって言うてるだろ。俺はあくまで「学者」なの」

言葉通りに受け止めれば、確かに「先生」と「学者」では意味も立場も違う。だがしかし、 狼男 は意地悪そうに牙を覗かせたまま言葉を続けていく。

「何をおっしゃる。常に妖精や妖怪、さらには魔物や悪魔までも幅広く研究を続け、人と人外との仲を取り持とうと努力していらっしゃるあなたのような方を、先生とお慕いして何がいけないのでしょうか？ いやはや、私はあなたのような方に仕事の助力をして頂ける名誉に、常日頃感謝していますよ」

まるで三文芝居しか出来ぬ役者のように、 狼男 は身振り手振りを付けながら熱弁を振るった。言葉に似合わず口元は歪んだまま。そのあからさまに感情のこもらない演説に、先生と呼ばれた学者は眉間の皺を更に深くしていく。

「……あまりうちの学者先生を虐めないで下さいます？ 一度へそを曲げると、その後処理をする私が大変になりますから」

ティーポットとティーカップを乗せたトレーを手にした女性が、気付くと二人の側に立っていた。

「一応私は家憑き妖精という立場上、館主の機嫌を損ねるような発言を見逃せませんの。不本意でも」

最後の言葉に引つ掛かる物を感じながらも、二人の男は真っ白なメイド服に身を包んだ家憑き妖精からティーカップを受け取った。

「へそを曲げられると自分がからかう余地が無くなって面白くない、の間違いじゃないのか？ アイリン」

狼男 の言葉に微笑みながら、彼女は答える。

「ケン、いけませんわ……判りきったことを仰っては」

「お前らなあ……」

学者は顎に当てていた手で顔を覆っていた。

「まあ……これでも感謝しているのは本当だぜ？」

含み笑いを漏らしながら言われてもいまいち説得力に欠けるが、しかし 狼男 の言葉は本心であった。



ハンターが獲物を狩るために情報を収集するように、そのハンターを狙うカウンターハンターである彼もまた、情報収集は不可欠である。その情報は自らも当然集めているが、テレビドラマの探偵が情報屋から情報を買い取るように、彼は妖精学者である肥えた男、<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男が「天道寺」と呼んだ男から情報を提供して貰っている。また天道寺にしても、人と人外の共存という理想のためにはカウンターハンターの協力が不可欠だった。

例えば今回、<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男が異端教団の少女と出会うきっかけとなった流言。それをばらまいたのは他ならぬ天道寺の手によるものだ。そしてあぶり出された獲物の直接的な対処は、天道寺ではなくカウンターハンターの狼男に委ねられている。

「感謝してるから……」「次」に進むために、また色々頼むよ」

調子の良い言葉に、学者は心中で溜息をつく。

「……で、その「次」とやらの為に、何をして欲しいんだ？」

ティーカップに一口手を付けてから、学者は本題を切り出した。切り出されたハンターは紅茶を一口、大きな口で一気に飲み干してから身を僅かに乗り出して話し始める。

「彼女を逃がした後、ペイント弾に染みこませた「匂い」を頼りに跡を付けていったんだが……辿り着いたのは、聖パトリック女学園の女学生寮だった」

学園の名前に、学者の眉がピクリと反応を示した。

「確かカトリック系で中高一貫の女子校だったか……ああ、確か君に噂を流してくれと頼まれた地域にあるんじゃないかなかったか？」

「その通り」<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男は頷き、話を続ける。「俺が目をつけていたのはその学院では無く、同じ地区にあるモデルガンショップだったんだが……いやまさか、女子校から釣れるとはね」

後頭部を掻きながら、今度は<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男が人間よりも広い眉間に皺を寄せた。彼にしてみたら、時折「動物虐待」の温床になってしまうモデルガンショップに噂を流せば、動物では飽き足らなくなった人間による「動物虐待」を始めようとする、あるいはもう始めているような狩人でも釣れるのではないかと想定していた。故にまさか少女が、しかもカトリック系の女子校寮に逃げ込むような少女が釣れるとは露程にも思っただけじゃなかった。

「ふむ……カトリック系の女子校に、異端教団の少女か。すると、学園自体が裏でグノーシス主義の布教をしていると？」

<sup>ウエア・ウルフ</sup>学者の推測に、<sup>ウエア・ウルフ</sup>狼男は首を横に振って答えた。

「そこまではなんと……ただ異端教団の少女が逃げ込んだ場所、という意外に何も判らない。だから、出来れば潜入して情報を得たいんだ。少なくとも中に潜れば、少女の言う「魔物に殺された」という両親のことも調べられるだろう。説得するならば、そこから調べる必要があるだろうしな」

面倒と言っていた割りに、カウンターハンターは自分の仕事を全うしようと考慮していた様子。それに学者は気をよくしたのか、軽く微笑んだ。

「……いいだろう。ちょっと難しそうだが、手配してみる」

手配するとはいえ、彼も万能ではない。それでも彼はあらゆる「人脈」をたどり、見た目だけなら縁遠そうな女子校への潜入を可能にしなければならぬ。もはや学者という領分を逸脱しているが、それでもどうにか手配してしまうからこそ、カウンターハンターから信頼されているのだと言える。

「で、潜入するのに使う名前は、本名の「大上賢」でいいのか？」

普通潜入捜査には偽名を使う物だ。しかし潜入者は手配者の提案に頷いた。

「相手は教育機関だからな。へ々に偽名を使うとばれた時にやっかいそうだし。それに自分で言うのも何だが……本名が偽名っぽいからな」

狼男の名字が大上とは、確かに出来すぎるくらいだ。だからこそむしろ、変な疑いは「まさかそんな判りやすい名前にするわけが無い」といなされることも多い。ならば無理に偽名を用いる必要はないと、彼は考えていた。

「ああ、それと「協力者」を何人が頼む。出来れば俺と違う立場で一緒に潜入してくれる味方がいると助かるんだが……」

了解したと、学者は頷いて依頼を引き受けた。そして学者は手配できそうな協力者の名前をハンターに提示する。挙げられた名前に、時には頷き、時には眉をひそめ、狼男は協力者の候補を絞りながら、再度彼らの協力依頼を頼むと学者に頼み込んだ。

「話に一段落付いたところで、宜しいかしら？」

紅茶のお代わりをティーカップに注ぎながら、白いメイド服を着た妖精が二人の会話に割って入る。

「ケン、アルケニーさんが呼んでたわよ。あなたが頼んでいたトレンチコートの修復が終わったみたい」

妖精学者の館を訪れた際に狼男が預けたトレンチコート。少女とのやりとりで細かい切り傷が付いてしまったコートの修復を頼んでいたのを思い出し、ケンは頷きながら答える。

「オーケー……ああ、その前に、この勝負をつけてからな」

学者の番で止まったままのチェス。ハンターらしい鋭い目つきで、ケンは学者を睨んだ。

この勝負、久しぶりに勝てそうなのだ。みすみす逃すことはない、狼男はニヤリとほくそ笑む。対して、久しぶりに勝ちを譲るのかと渋い顔をする学者は、また顎に手を当て考え込んでしまった。

「早くしないと、またアルケニーさんにどやされますよ？」

言いながら、アイリンはトレーを右脇に挟み、左手で白いビショップの駒をつまんだ。

「……これどう？」

白の学者と黒のハンター。どちらのプレイヤーも考えつかなかった一手が、アツサリと盤面に打たれた。

「次で王手、更に後三手で終局かしら？」

メイドが動かしたビショップで取り除かれたのはルーク。攻めることばかりに気をとられていたハンターは、手薄になっていた守りに気付かず、また守りばかりを考えていた学者も攻めの一手は思いつかないでいた。唯一客観的に見ていた彼女だけが、最善の一手に気付いていたようだ。次に黒のハンターがどのように駒を動かそうと、その次で王手がかけられれば守りに入るしか無く、彼女の宣言通りなら最短で三手後には負ける。これは実質的な終局とも言えた。

「……そうだな、待たせると悪い。勝負はまたにしよう、鷹丸」

学者を名前で呼びながら、一方的に流局を宣言する。つまり、この勝負はなかったことにしようというわけだ。この申し出に、苦笑いで学者は頷いた。彼にしても、人の手が加

わった勝負で勝ちたいとは思わなかったらしい。

指で頬を掻きながら 狼男<sup>ウエアー・ウルフ</sup> はソファァーから立ち上がり、応接室を出て行く。向かう先は当然、ゲームを中断してまでも会いに行かなければならない女性の部屋である。

部屋の中は服であふれていた。まるでダンスの中にも入り込んだのかと錯覚してしまふような室内。ケンには数多の洋服をジャングルの中で茂みをかき分けていくかのように端へ寄せながら中央まで進んでいく。

「いつも思うが、こうして服をかき分けた先には一面の銀世界が待っているんじゃないかってヒヤヒヤするね」

残念ながら 狼男<sup>ウエアー・ウルフ</sup> が空想するような古典童話<sup>ナールニア画</sup>の世界は、そこには無い。先に待っていた光景は、少しだけ開けた場所とそこに響くミシンの機械音。そして一人の女性だけである。

「私が傘と荷物を持って現れたら、少しはそれらしくなるとでも？」

ケンの声<sup>ジョーク</sup>に女性はミシンを止め、あきれ顔で振り返った。彼女は確かに半人半獣<sup>フォイン</sup>ではなかったが、「半分は人」という点だけは合致している。

腰から上は美しいギリシャの女性。しかし下半身は六本の脚を持った蜘蛛の身体。半分は人だが半分は虫。彼女もまた、狼男<sup>ウエアー・ウルフ</sup> と同じく魔物の女性であった。

「いや、あんたの場合は魔女のほ……んん、とここでアルケニー、俺のコートが直ったって聞いて来たんだが？」

じとりと細くなる目に恐れを成し、ケンは言いかけた言葉を無理矢理抑え本題を切り出した。未だ目を細めたままの機織り娘<sup>アルケニー</sup>は、側に立てかけていたトレンチコートを手に取り依頼人へ突き出した。

「前から言ってるけど、どうしてこんな動きづらい格好で戦うのよ。そもそも、その身体<sup>体毛</sup>でこんな防寒着はいらないでしょ？」

暖かく柔らかい冬毛に包まれている男は、差し出された自分のコートを片手で受け取りながら、残った片手の人差し指を立て、軽く左右に揺らす。

「だから言ってるだろ？ ハードボイルドって言ったらトレンチコート。これは譲れないね」

アルケニーの細めた目はそのままだが、その意味合いは変わっている。短く漏れた笑い声が苦みのある物だったから。

そこまでハードボイルドを気取るなら、もう少しクールになったら？ と煽る言葉が喉にまで出かかったところで、蜘蛛女<sup>アルケニー</sup>はそれを飲み込んだ。それを言い出すと、何度目かになる彼の身勝手な「ハードボイルド論」を聞かされることになるから。以前彼女は、そこまでトレンチコートにこだわるなら同じくらい重要な小道具<sup>アイテム</sup>であろうタバコは何故吸えないのか、と問いただして後悔したことがある。流石に同じ轍<sup>轍</sup>を二度も踏みたくはないものだ。まあ、実際には何度か踏んでしまっただけだ。

「それにこのコートは耐水耐火、そして耐<sup>く</sup>魔に優れた蜘蛛マークのブランド物。俺のお気に入りだからさ」

それは遠回しな褒め言葉。蜘蛛のマークが入った「レディウェブ」は、彼女の銘柄<sup>ブランド</sup>だか

ら。褒められて悪い気はしないアルケニーは多少顔を綻ほころばせるが、しかしすぐにまた口元を歪ませる。

「それは別にトレンチコートでなくても、私の銘柄ブランドなら全部そうなの」

レディウエブは極一部の者達のみで流通している銘柄ブランド。蜘蛛のマークは、彼女がデザインし自ら吐き出す「蜘蛛女の糸アルケニー」で織り込まれた一点物の証。彼女の糸には魔力が宿っており、ハードボイルド気取りが言う、あらゆる厄災からある程度身を守る効果がある。

「それに、切り傷に関しては普通の服と同じ。お気に入りっていうなら、何度も何度もボロボロにしては修繕しに持ってこないでよね」

糸に魔力はあるが、その魔力は刃物には無意味。むしろそうでないと、糸を使って服を作ることが出来ない。コートは表から見て目立たないが、裏返せば至る所に修理した後が見て取れる。その数は、もしこのコートが高価な一流ブランド物だったとしたら買い換えの方が修繕費よりも安くなるだろうと思える程に多かった。

「修理する手間もそうだけど、糸だって無限に採れるわけじゃないんだからね。もうちょっと、私の苦労とか色々気遣うことがあるんじゃないの？」そしてふと何かを思いついた彼女は、ニヤリと口元を歪ませ言葉を続けた。「そうね、たまには目に見える形で、アンタの誠意を見せてくれないかしら？」

基本的に、仕立屋アルケニーはコートの修理に金銭は要求しない。妖精学者フェアリードクターの館に居候している彼女は、館の主を手助けする事が義務の一つと捉えており、カウンターハンターの請求は彼の仕事を手助けしている妖精学者からの要請でもあるとして受け入れている。そもそも彼女にとって糸を紡ぐところから服の制作に至るまでの作業自体が趣味のような物で、特に苦勞を感じるところはない。しかしだからといって、さも当然のように何度も修理を要求されるのは気持ちの良いことではないし、自分が手がけた愛すべき洋服達子供を無下に扱われるのは我慢ならない。ならばたまには、形ある感謝を要求しても問題はないだろう。

「もちろん、何時だって感謝してるさ。ああそうさ、もちろん何時だってね。だからほら、ええと……うん、その、なんだ……」

感謝はしている。その言葉に嘘はないのだが、それをどう伝えれば良いのか。

時と場の雰囲気によって様々だが、ケンアルケニーは仕立屋に感謝の意は常に示しているつもりだ。それはむしろ彼女にも伝わっているのだが、形で示せと言われると、何を差し出せば良いのか悩む。とりあえず言葉は先走ったものの、そこからが続かない。その、あの、といった小声ばかりが大きな口から漏れるだけ。

「ハードボイルドを気取る割りには、女性の扱いがなってないわねえ、相変わらず。もうちょっと、大人の女性に気の利いた言葉やプレゼントは出来ないの？」

痛いところをつかれた。その、あの、どこるかぐうの音も出ない。彼女が指摘している通り、彼の理想は現実の言動と一致していない。だからこそトレンチコートといったような形から入ろうとしている訳なのだが。

「まあいいわ、始めから期待してなかったから。そうね……次に来る時くらいは、甘い言葉と甘いケーキくらい用意して来なさい」

むしろからかうことで多少気は晴れた。アルケニーは頭と耳と肩と尻尾を力無く落としているケンへ苦笑混じりに声を掛ける。そもそも彼はコートを無下に扱っているわけでも修理を当然と思っているわけでもない。彼は単純に、気恥ずかしさから軽い言葉と態度以

外で感謝を示すことが出来ないだけ。だがそれでは、彼女の言う通りハードボイルドを気取るには少しお粗末だろう。

うなだれたまま部屋を出て行くハードボイルド気取りは、甘いケーキの準備はまだしも、さて甘い言葉をどうチョイスすべきかに悩んでいた。そして思考は何時しか、洋画と国産ドラマのどちらを見直そうか。それとも小説の方が言葉を選びやすいか？ といった、おそらく誤った方向へ流れ、選択を真剣に検討し始めていた。